





歌碑祭寸景

あるから、恐縮だが母も一緒に招待して貰えないだろうか」と申し出た。勿論それは快諾されて、当夜は母親と共にその晴れの歓迎会に臨んだのであった。発起人を代表して坪谷郵便局長須九市氏の歓迎の言葉があり、先生も鄭重な謝辞を述べたが、出席者は坪谷の人たちを主に村内の有志旧友たち三、四十名、村として

のであり、いま坪谷神社に残って居る。久し振に故郷に帰り来れば旧友矢野伊作、富山豊吉の両君の板を持参して、氏神に奉る歌書けといふはち氏子の一人、若山牧水

2 祖父、父母 牧水先生の祖父は若山健海といひ、文化八年二月三日、現在の埼玉県入間郡所沢町字神楽に生れた。所沢から一里半ばかりの農村、その家は農家だが、三代ばかりの前は医者をしたり寺小屋をやっていたりした者もあるかなりの家が、先祖父は甲州武田の家臣若山主計といふ者であ

種痘 Koepok 伝 嘉永西初春上旬到于崎陽蘭人 Mohike 君為師得是術而歸于宮崎之連名と記して、三月六日に福島退庵伴一郎、若山健海に所してそれから四月六日まで同地で種痘を続け、四月末からは美津津で種痘を行なったことが明記してあるが、これはわが国の種痘伝来史の上では非常に重要な記録である。この嘉永元年に長崎出島蘭館医官として来朝したドクトル・モニーケが種痘を試みて成功したのは嘉永二年六月だといふのが日本医学史の定説となつて居るのだが、右の健海の「種痘人名録」に「嘉永二年から、その初春に長崎で三月六日にこれを施したといふことになれば、これまでの定説は覆えされることとなつてしまふ。そしてそうならば、若山健海は単に歌人牧水の祖父とだけ見て、当時の一大先覚者として歴史の上に新たに登場せねばならなくなつて来るわけだ。

健海の手記に誤りがあるうとは思えない。ただその傍証となるものが未だ発見されないのであるが、何れにしても日向の僻村に住んでいてモニーケに種痘を学ばせられたのは、その時ばかりでなく、その後も何れにいつかは当然御贈りの御沙汰位は受けていた筈である。それを思えば、東郷村は歌人牧水だけではない、若山健海をも誇つてよ

3 歌碑 その他 前述のように郷里に歸る機会こそ少なかったけれど、牧水先生が常にその美しい郷土の山川を愛しなかつたかといふことは、その数多い歌集の中にも殆んど懐郷の歌のあることによつてはつきりとわかる。先生の生前日向の人たちがどれだけの先生の真価を解して、はちと疑問が、歿後先生を慕う人が次第に多くなり、戦後特にはその傾向が著しくなつて来たことはまことに喜ばしい。

牧水先生の歌碑は現在全国で四十三カ所に建設されて居るが、延岡市城山公園、串間市の都井岬、郷里坪谷と母校恒富高校(旧延岡中学)都農町、日向市美津町、日向市細島町、高千穂町の八つは宮崎県内にある。延岡の歌碑は昭和十年三月二十一日に除幕式が行なわれたが、歌は「なつかしき城山の鐘鳴りいでぬ幼かりし日さきし如くに」で、これは昭和二年七月二十日、延岡で作つたものである。

都井岬の歌碑は昭和二十二年九月十七日に除幕式が行なわれ、歌は「日向の國都井の岬の青潮に入りゆく端に一人海を」で、これは二十三年の明治四十年夏中休暇帰省中に、当時都井村に出張して診療に従事していた父立蔵を訪ねた時の作である。ただ若い時の作で先生自身の筆蹟がなかったため、文字だけは喜志子夫人の筆になつた。

郷里坪谷の歌碑建設の計画は、いよいよ実行に移つたのは都井の歌碑と殆んど同時だった。歌は「みなかみ」巻頭の「ふるさと」の尾鈴の山のかなしきよ秋も霞のたなびきてをり」で、誰しも異存のないところ、そして碑石は生家の裏の小山をちよつと登つた俗に和田越と呼ばれる小さな峠の道に位置する巨石をそのままの位置で使うことに決まつた。この巨石は明治四十二年の大暴風雨の時にすこし上からころげ落ちたものだが、大正の初め父親の病気で帰つて来た牧水先生は毎日のようにこの石に來ては石の上の石のほつたところに眺めながら物思いに耽つたり、寝ころんで本を読んだりして居たので、私は「ふるさと」の歌も多分この石の上で作つたものだろうと想像して居る。それほど由緒の深いものだし位置も実によく、歌碑の碑石にこれが選ばれたのはまことに當を得たものであり、いろいろな意味で牧水歌碑中の代表的なものと一言つてよい。(ただ位置の関係と、自然にある巨石とのまま刻んだものであるため、写真の撮影が非常にむづかしく、写真も鮮明でないのが残念である。)

歌碑と同時に生家の庭には、「牧水生誕地」といふ碑も建設された。これは先生の旧友海野実門氏の筆になつた。ただ私がいつかふらふらと書き加えておきた「一生旅路酒ト寂ヲ愛シ、自ら三聯ト称セシガ」といふ句である。これはちよつと誤解されやすく、牧水先生が常に自ら「三聯」と稱していたように聞こえるが、そうではない。先生自らそう稱していたことがあつたとしても、それは極めて短い一時期にしか過ぎなかつたであらう。

故郷の歌 懐郷の歌

若山 牧水

海の声

母恋しかる夕べのふるさとをのぼる桜咲くらむ山の姿よ春は来ぬ老いにし父の御ひとみに白うつらむ山ざくら花父母よ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや山ざくら花日向の國むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴の日やこほろぎや寝ものがたりをりをりに涙もまじるふるさとの家檜樹の古樹を想へその葉蔭海見て石に似る男をも(青島より)日向の國都井の岬の青潮に入りゆく端に独り海見る

独り歌へる

雲去ればもの、かげなくうす赤き夕日の山に秋風を吹く(故郷)峰あまた横ほり伏せる峽間の河越えむとし蠅を聞く父の髪母の髪みな白み来ぬ子はまた遠く旅をおもへる一人のわがたらちねの母にさへおのがこころの解けずなりぬる

別離

ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへる彼の岡の上に園を痛み泣けば背負ひてわが母は峽の小川に魚を釣りにき父おほく家に在らざり夕さればはやく戸を閉し母と寝にけるふるさと山のおくなる山なりきうら若き母の乳にすがりきふるさと山五月の杉の木に斧振る友のおもかげの見ゆおもひやるかのうす青き峽のおくわのれまれし朝のさびしき親も見じ姉もいとほふるさとにただ檜樹を見にかへりたりふるさと美津津の川のみなかにひとり母の病みたまふとぞさくら早や背戸の山辺に散りゆきしかの納戸にや臥したまふらむ病む母よかわりはてたる汝が児を枕にちかく見むと想ふな病む母のまくらにつどい泣きぬれて姉もいかにわかれを恨まむ病む母を眼とちおもへばかたはらのゆふべの膳に酒の匂へる病む母をなぐさめかねつけくれの庭や掃くらむふるさとの父

路の上

ふるさとをのぼる山のかなしきよ秋もかすみのたなびきて居り眼や病める涙ながれてはてもなし秋の朝日の裏山行けば秋のおち葉梅檀の木にかけあがり来よと児猫がわねにいどめる阿蘇荒の日にかもあらめうすうすとかすみのごとく秋の山曇る母が飼ふ秋蚕の匂ひたちまよふ家の片すみ置きぬ机をいづくにか父の声きこゆこの古き大きな家の秋のゆふべにまんまるに袖ひきはせ足ちぢめ日向にねむる父よ風邪ひかめ父よなど坐るとすればうとうと薄きねむりに耽りたまふぞとりわけて夕日よくさす古家の西の窓辺は父のよく居るところほたはたとよるこぶ父のあから顔の世ならぬ尊きに涙おちぬれ父よいざ出て給へたすけまらせむこの低き岡越ゆることなほわがそばに心ぬけたるすがたしてとすれば父の來て居ること多し

みなかみ

ふるさとをのぼる山のかなしきよ秋もかすみのたなびきて居り眼や病める涙ながれてはてもなし秋の朝日の裏山行けば秋のおち葉梅檀の木にかけあがり来よと児猫がわねにいどめる阿蘇荒の日にかもあらめうすうすとかすみのごとく秋の山曇る母が飼ふ秋蚕の匂ひたちまよふ家の片すみ置きぬ机をいづくにか父の声きこゆこの古き大きな家の秋のゆふべにまんまるに袖ひきはせ足ちぢめ日向にねむる父よ風邪ひかめ父よなど坐るとすればうとうと薄きねむりに耽りたまふぞとりわけて夕日よくさす古家の西の窓辺は父のよく居るところほたはたとよるこぶ父のあから顔の世ならぬ尊きに涙おちぬれ父よいざ出て給へたすけまらせむこの低き岡越ゆることなほわがそばに心ぬけたるすがたしてとすれば父の來て居ること多し